書評

W・J・ボート、高山大毅編『荻生徂徠哲学必携』

W. J. Boot and Takayama Daiki, eds. *Tetsugaku Companion to Ogyū Sorai*

山本嘉孝

Springer, 2019

本書は、江戸時代の日本を代表する儒者の一人である荻生徂徠（一六六六～一七二八）の著述と思想について英文で記された解題八篇と論文七篇を収めた論集である。シュプリンガー社から刊行中の《日本哲学必携》シリーズ（Tetsugaku Companions to Japanese Philosophy）の第二冊として、二〇一九年に刊行された。冊子版（ハード・ソフトカバーの両方）と電子版（PDF形式）が存在する。なお評者は、本書を電子版のみで読んだ。

二名の編者は、オランダを拠点に日本近世思想史研究を牽引してこられているW・J・ボート氏と、今日の日本における荻生徂徠研究の第一人者の一人、高山大毅氏である。夢の共演といっても過言ではない。両氏を含む、合計九名の経験豊かな日本思想史研究者が寄稿しており、おのおのが居住し研究の拠点とする場所は実に多様で、日本（五名）の他、オーストラリア・オランダ・台湾・アメリカ（各一名）にわたる。日本国内を拠点とする執筆者の担当分は、ボート氏が全て英訳されたという（p. 7）。

本書はたまたま英語で記されているが、何語においても、これほど多彩なメンバーが揃い、荻生徂徠の著述と思想について多角的な視座から考究した論集は、これまで存在していなかった。異分野の読者でも理解しやすいよう、徂徠やその周辺に関係する基礎的な事項についても丁寧な説明が付される一方で、近世日本の漢学や思想史を専門とする者にとっても、十二分に読み応えがある内容となっている。以下、その中身を紹介しよう。

まず構成について記す。本書は二部構成をとる。ボート氏による行き届いた序言（第一章）の後、第一部の解題篇、第二部の論

文篇と続き、最後に詳細な索引が置かれている。

第一部の解題八篇（第二〜九章）は、『訳文筌蹄』から『徂徠集』まで、現存する徂徠の主要な著述について、成立の時期や背景、内容、伝本、先行研究等の概要を提示する。各篇は異なる担当者によって執筆されており、八篇の排列は概ね著述の成立順に従う。このようにまとまった形の「日本式の解題」（*kaidai* 解題 in the Japanese manner, p. 7）を載せる英文の書籍は先例が少ないように思うが、一次資料のあらましを最初に提示するという方法は大変有効であり、今後、本書を模範とし、英語・日本語・その他の言語を問わず、「解題」に重きを置く研究書が増えれば喜ばしい限りである。

第二部の論文七篇（第十〜十六章）は、内容によって、徂徠の伝記（第十章）、徂徠の思想の特徴（第十一〜十三章）、後世における徂徠学の受容（第十四〜十六章）に大別できる。澤井啓一氏による徂徠の伝記は、少年期から老年期までの徂徠の命運が、将軍が代替わりするごとに浮き沈みした様相を克明に描き、それが徂徠の著述や思想に影響を及ぼしたことを具体的に指摘しながら、徂徠を理解するための盤石な土台を築き上げている（第十章）。

続く三篇は、それぞれに全く異なる切り口から、徂徠の思想を鋭く分析する。小島康敬氏は、徂徠が提唱した模倣中心の学習方法に、心よりも身体を重視する姿勢が明確に存在していたことを指摘する（第十一章）。オリヴィエ・アンサール氏は、徂徠の鬼神論に「天」と「作為」の位置づけをめぐる矛盾が存在したことを明らかにしつつ、近世日本の武家社会のあり方と関連づけることによって、その矛盾のなかに一貫性を見出す（第十二章）。ジョン・タッカー氏は、徂徠の赤穂浪士論を取り上げ、徂徠作とされることのある『擬律書』は偽書である可能性が高いこと、徂徠が理想とした忠義は、赤穂浪士よりも、「上総の（素朴な）田舎者の百姓」（Kazusa's rustic peasantry, p. 103）であった市兵衛の生き方に見出されたこと、徂徠と福澤諭吉の赤穂浪士論に共通点が見られることなど、具体的かつ有益な指摘を行う（第十三章）。アンサール氏とタッカー氏の論は、徂徠の思想が、過去（古代中国）を志向するだけでなく、現在（当代日本）に根差すものでもあったことを端的に示しており、徂徠研究に新しい風を吹き込んでいる。

末尾の三篇は、それぞれ、江戸時代後半の日本、清代中国と朝鮮、戦後日本における徂徠受容・徂徠研究を概観する内容である。ボート氏は、徂徠学を門人の立場で継承した服部南郭と太宰春台、徂徠に正面から反論した五井蘭洲と中井竹山、徂徠を意識しつつ乗り越えようとした人物の事例として皆川淇園を取り上げており、殊に淇園と徂徠の比較が示唆に富んでいる（第十四章）。藍弘岳氏は、先行研究を丁寧に踏まえながら、十八〜十九世紀の清朝と朝鮮で徂徠とその門下の著述の一部が読まれたこと、しかしその影

響は限定的であったことを示し、特に戴震の学術を中心とする清朝考証学と徂徠学の対比も行う（第十五章）。高山氏は、丸山眞男『日本政治思想史研究』（一九五二年）から二〇一〇年代までの徂徠研究について、時期ごとの傾向を明らかにしつつ、それぞれの研究手法や視座の長短を評している（第十六章）。なお同章は、同氏「〈研究動向〉21世紀の徂徠学」（『思想』二〇一六年十二月号）の増訂版であることが明記されている（p. 177）。

以上に紹介した通り、この一冊には、日本国内外の日本思想史研究者たちによる徂徠研究の最新の成果が凝縮されている。英語で書かれてはいるが、編者の方針により、人名・書名・原文等の漢字表記が文中に細やかに付されており、漢字圏の読者にとっても読みやすいよう配慮がなされている。日本国内を拠点とする読者にも、ぜひ手に取って頂きたく思う。

敢えて欲張りを言えば、先行研究ないし参考文献の挙げ方に、もう少し注意が払われてもよかったかもしれない。評者にとってやや不可解であったのは、Emanuel Pastreich氏による論文「Grappling with Chinese Writing as a Material Language: Ogyū Sorai's *Yakubunsenteki*」（*Harvard Journal of Asiatic Studies* 61: 1, 二〇〇一年）への言及が、第二章の『訳文筌蹄』解題において欠如している点である。同論文の付録には、『訳文筌蹄』初編の「題言十則」全体の英訳が載っており、貴重な先行研究である。また、第三章の兵学関連書の解題で、野口武彦氏の『江戸の兵学思想』（一九九一年）が参考文献に挙げられていないことも不思議であった。第八・九章の『政談』・『太平記』と『徂徠集』の解題に至っては、参考文献が一つも挙げられていない。そもそも、解題の書き方について統一的な方針が定められていなかった可能性がある。解題は、個別の担当者に一任するのではなく、編者あるいは執筆者一同が草稿全体に目を通した上で、ある程度まで体裁を揃え、互いに不足を補い合うことがあってもよかったのではないか。また、論文篇の第十二章が、子安宣邦『徂徠学講義――『弁名』を読む』（二〇〇八年）を参考文献に挙げていない点も気になった。同書の「第十講「鬼神」」では、徂徠の鬼神論に焦点が当てられている。

更に欲張りを言うと、徂徠学と和学・国学の関係性について、紹介・解説する箇所があってもよかったのではないか。第十章で、国学者たち（ただし、人物は特定されない）のテニヲハ論への言及がなされ、それが徂徠学の影響下にあったことが示唆されるが、注は付されておらず、参考文献も示されていない（p. 57）。評者が確認した限りでは、和文脈への主だった言及は、この他に見当たらなかった。本書は漢文脈のみに焦点を絞っているが、そのことに必ずしも自覚的ではないように感じられた。徂徠学と国学の関係性を取り上げた比較的最近の研究書には、Peter Flueckiger氏の *Imagining Harmony: Poetry, Empathy, and Community in Mid-Tokugawa*

Confucianism and Nativism（二〇一〇年）や、板東洋介氏の『徂徠学派から国学へ――表現する人間』（二〇一九年）などがある。後者は本書と同年の刊行であるので、本書で言及されないのは当然だが、ここでは、本書とあわせて読まれるべき参考文献として紹介しておきたい。

最後に、もう一つだけ、欲張りを言うならば、編者両人による《編集後記》のような文章が読みたかった。ボート氏による序言（第一章）はそれに相当するといえるが、編者として名を連ねる高山氏は、本書全体に対する見解を示していない（あるいは、そのような機会を与えられていない）。本書は全体的な総括がなされないまま、やや唐突に終わってしまう。高山氏があとがきを記し、本書が当初、どのような方向性で構想されたのか、また、一冊にまとめる過程を経て見えてきた課題や問題点等について、編者としての考えや思いを読者と共有することがあってもよかったのではないか。

色々と欲張りなことを記したが、これらのことは、本書の価値を減ずるものではない。高度な専門性を犠牲にせずに、幅広い読者に対して最新で確実な情報を提供し問題提起する、という最も難しい技を本書は見事に成し遂げている。その裏には、全ての執筆者たちの長年の研鑽と深い学識があり、また、編者としての任務を負い、自らの論考をも執筆しながら、実に大量の英訳をこなされたボート氏の並々ならぬ尽力がある。日本研究や日本思想史研究という狭い枠にとどまらず、世界哲学史・比較思想史の《必携》書たるにふさわしい学術的水準と内容の豊かさが本書に備わっていることは、間違いない。